

結城デザインのフォーマル化研究(第2報)

石川 章弘* 望月 政夫*

1. 諸言

洋装化が進み、フォーマルな場所での装いとしての需要が高まっている着物のなかで、結城紬は最高級品でありながらカジュアルな場所での装いとされているという性質から、用途が限られるために消費者にはなかなか受け入れられていない。そこで、マーケットの拡大を図ることを目的として結城紬のフォーマル化を検討した。

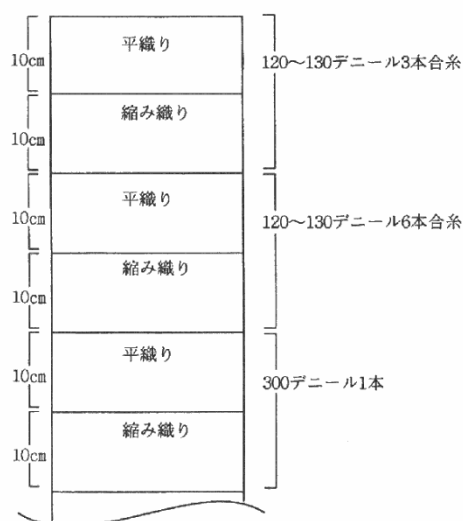
2. サンプル試織

サンプル試織に当たっては業界関係者が5グループに分かれ、それぞれ違った糸使いや技法を試みた。

2.1 Aグループ（4名）

縮み織りの技法を用い帯の試作のためのサンプルを織った。今までにないようなものを、ということで平織りと縮み織りを同一の布に配することにした。

- (1) 経糸（たていと）について
本場結城紬の糸である手紡糸を使用した。160デニール。また、途中から6本に1本抜き、3本に1本抜きとし、経糸密度も変えてみた。
- (2) 緯糸（よこいと）について
同じく本場結城紬の糸である手紡糸を使用した。3通りの太さを用意し、それぞれ 300デニール1本、120～130デニール3本合糸、120～130デニール6本合糸とした。また、平織りと縮み織りを配するためにそれぞれ撚らない糸と撚りを掛けた糸を用意した。
- (3) 織りについて
図1に示す通りである。



以下、横糸の打ち込みは変えずに経糸を6本に1本、3本に1本抜いていく。
図1 Aグループサンプル略図

2.2 Bグループ（6名）

異なる糸を経糸と横糸に配し、糸の質感の違いで縞模様が出るようにした。また、付け下げ調になるようによこ縞を絵

羽模様になるように考えて織りあげた。色使いは結城紬には見られないような色味のレモンイエローを地色とし、よこ縞に赤、橙、紺及び緑を配した。糸は本場結城紬の手紡糸にこだわらずにコスト削減を考慮して安価なものを使うことにした。織機も結城の地機を使用せずに高機を使用して時間削減も図った。（図2）

- (1) 経糸について
生糸140デニールと手紡糸140デニールを使い糸の違いで縦縞が出るように配した。
- (2) 緯糸について
経糸と同じく生糸140デニールと手紡糸140デニールを使い、地の部分は生糸でよこ縞になる部分は染色した手紡糸を使用した。

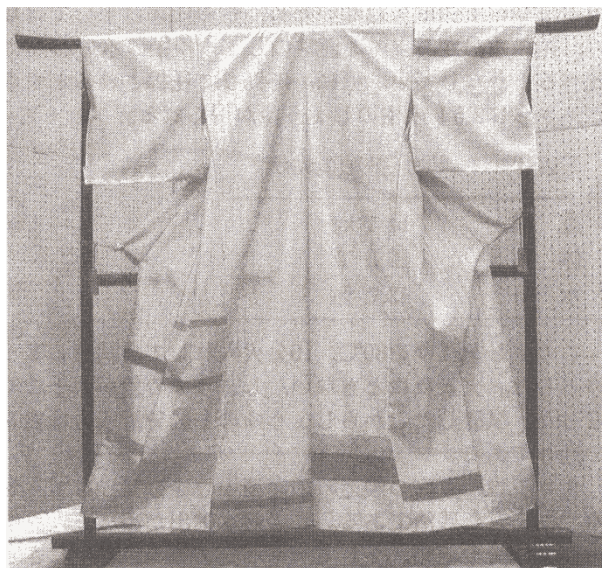


図2 Bグループサンプル

2.3 Cグループ（5名）

無地のフォーマル着として礼服用に黒の結城紬を織った。また結城紬の糸の性質上、製織中に経糸切れが頻繁に起こり作業能率が悪いので、その改善策として経糸にソルブロン（ポリビニルアルコール）の単繊維をクロスに絡め強度を持たせた（図3）。ソルブロンは湯に溶けるので商品にする前に湯に通す作業を必要とする。結城紬の縮み織りの場合だと商品化の前に湯に通す工程があるので試作は縮み織りにした。

- (1) 経糸について
手紡糸にソルブロンをクロスに絡めたものを使用した。
- (2) 緯糸について
縮み織りにするために強く撚りを掛けた糸（約1800回転）を使用した。

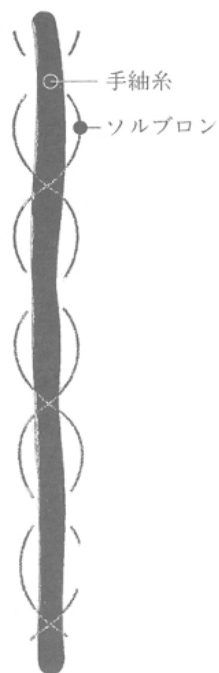


図3 ソルブロン絡めの略図

2.4 Dグループ（8名）

コンピュータを使い、20代のOLが友人の結婚式に着ていくようなものというコンセプトのもとに一人一点ずつ柄を考え、その中から試作するものを一つに絞り込んだ。デザインの特徴としては赤と黒を大胆に配し、裾と肩口に大きな黒のグラデーションの波模様があり胸から胴、腰下にかけては赤い無地である（図4）。図案の再検討、手直しをしていてまだサンプル試作まで進めない状態である。



図4 Dグループ

コンピュータによるデザインの着付けシュミレーション

2.5 Eグループ（3名）

コンピュータを使い従来の結城紬にはあまり見られない絵羽調の図案を考案する（図5.1 図5.2 図5.3）。結城紬の場合、先染の細かい緋で柄を表現するため、後染織物のようなはっきりした柄は表現できない。この図案の不利点を解消するために、緯糸全面に柄を染め付けた緯総の訪問着の作成を目指す。サンプル織りのための糸の染め付けまで完成した。

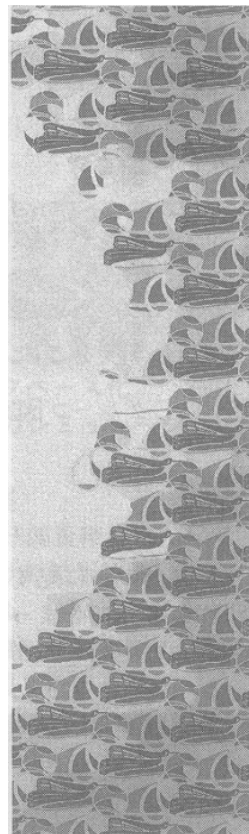


図5.1 Eグループ図案



図5.2 Eグループ図案

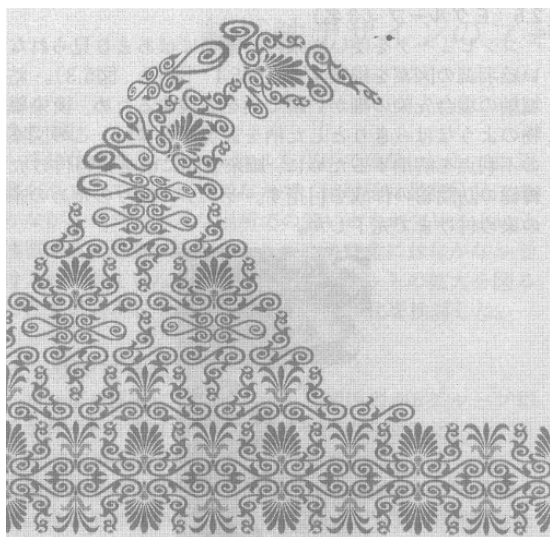


図5.3 Eグループ図案

3. 結果及び考察

3.1 Aグループ

平織りと縮み織りを同一の布に配することが幅を均一にそろえることの妨げとなってしまった。また経糸を少なくすることで密度の荒い夏向きの布となった。

3.2 Bグループ

糸の質感の違いで地模様風の柄が織りあがった。今回は緯糸に地色とは違う色の糸を使用したけど、全体に同一色で織りあげても良いと思われた。また、縞割の仕方を色々変えてみることでより良いものになるように思われた。

3.3 Cグループ

ソルブロンを経糸に絡ませることにより経糸切れはいくら防ぐことができた。しかしソルブロンが切れるとその後

処理が面倒であり、またソルブロンを絡めるコストと時間を考慮すると作業能率が上がるのかどうか疑問となった。

結城の縮み織りが黒無地の礼服として消費者あるいは問屋に受け入れられるかどうか今後の課題である。

3.4 Dグループ

まだサンプル作成まで至っていないが、図案の段階で時間をかけるということが今後のサンプル作成に良い影響を与えたと思われる。

3.5 Eグループ

Dグループ同様図案の段階で時間をかけているので今後の良い影響を与えられると思われる。また、このグループは平均年齢が他グループに比べずっと低いので柔軟な発想が期待できる。

4. 結言

結城紬のデザインをフォーマル化することは、反物の制作上の技術的な難しさを伴うが、可能だと思える。しかしながら、結城紬の歴史的背景、手紬糸による布面の光沢のなさ、流通の仕組み、着物に対する堅苦しい先入観、着物の細かい用途としきたり、洋装に比べたときの着難さ、価格の高額さなど、デザインを変えるだけでは解決できないさまざまな問題が残されている。これらの問題は、仮に着物を日常的に皆が着ているとしたら、ほんの少しの小さなきっかけさえあれば何の問題でも無くなってしまふことのようにも思える。しかし現実には着物に対する特別な考え方は、浴衣が流行しているとはいえ、なかなか和らぎそうにないようである。

結城紬が堂々とフォーマルとして着られるようになるには、デザインの問題よりもむしろ着物に対する認識の問題の方が大きいといえるが、着物に対する考え方が自由になればその問題も解決されると考えられる。